

『風の歌を聴け』

～ 群像新人文学賞受賞作品 ～

村上 春樹

『風の歌を聴け』は、村上春樹のデビュー作であり、初期三部作へと繋がる村上ワールドの原点というべき長編小説です。

芥川賞候補となりますが、何人かの選考委員から厳しい批判を受けます。たとえば、「今日のアメリカ小説をたくみに模倣した作品もあったが、それが作者をかれ独自の創造に向けて訓練する、そのような方向付けにないのが、作者自身にも読み手にも無益な試みのように感じられた」・・・等々。

村上作品の多くは外国語に翻訳されていますが、村上自身も、「自身が未熟な時代の作品」と評価していたため、2015年まで英訳されなかった小説でもあります。

しかしながら、デビュー作『風の歌を聴け』は、今までの日本文学にはなかった、何か新しい感覚を突きつけるような、そんな小説であると私は思っています。まして、“読み手にも無益な試み”という批評に対して、そう思わない読み手は、世界中に数え切れないほどいると思います。

ストーリー：東京の大学に通っていた「僕」は故郷の海辺の街に帰省したとき、かけがえのない友人「鼠」からの意外な告白を聴き、偶然にも不思議な女の子と出会い、行き付けのジェイズ・バーの美味しいビールを飲む。1970年の8月8日～8月26日までの短い夏に、「僕」の中に刻まれた忘れることのできない思い出。

